

福島第一原発の廃炉状況を視察しました

全国山村振興連盟事務局長 實重重実

8月4日・5日の2日間にわたり福島県支部の主催で開催された「北海道・東北六県山村振興ブロック会議」では、2日目の8月日には、大熊町・双葉町にある福島第一原子力発電所の廃炉状況を視察させていただきました。会議メンバーの一行は、東京電力のバスに乗って、福島第一原発新事務本館へ移動し、説明を受けてから、構内の視察をさせていただきました。構内に入るに当たっては、事前申請に加えて、金属検査や持ち物検査など何重ものチェックがあり、更に防護服を着用した上で線量計を持って視察をします。

原発事故では1号機から4号機までが破損したのですが、各号機ともに現在は冷温停止状態を継続しています。圧力容器温度や格納容器温度をはじめとしたパラメータは、24時間常に監視が継続されていました。

多核種除去設備（ALPS）により汚染水を浄化した後のALPS処理水については、トリチウム以外の放射性物質の濃度が国の基準を満たすまで最小化処理を行い、更にトリチウムの規制基準を十分に満たすよう海水で希釀した上で、海洋放出を行っているとのことです。

また原子炉の中に残されている核燃料デブリ（事故により溶け落ちた核燃料）については、取り扱いが極めて難しく、昨年と今年にそれぞれ耳かき1杯程度の核燃料デブリを試験的に取り出すことに成功したとのことです。しかし、このペースで取り出したのでは数百年を要することとなるため、技術開発を行って廃炉作業のスピードアップを図ることが必要だと説明っていました。

私たちもバスで構内を見学させていただきながら、ところどころで歩き、特に1号機から4号機のそばでもバスを降りて、視察をさせていただきました。

最後に身体スクリーニングをして、どの程度の放射線を浴びたかをチェックします。歯医者でレントゲンを撮る1回分程度の放射線量だったとのことでした。

このように福島第一原発では、計画的なALPS処理水の海洋放出に続き、核燃料デブリの試験的取り出しが実施されるなど、ようやく本格的な廃炉のスタートラインに立ったところです。しかし福島県復興の前提となる廃炉には、多くの課題があると言われており、まだ長い時間が必要だとのことでした。

震災と原発事故は、福島県民にとってかつてない悲痛な出来事でしたが、復興のためには、引き続き国民が挙げて福島県を支援していくことが必要だと痛感した視察となりました。